
 学 会 記 事

第 5 回上越胆石胆汁酸研究会

日 時 昭和62年 9 月 5 日 (土)
午後 3 時より
会 場 東映ホテル (2 階 朱鷺の間)

一 般 演 題

1) 右下側臥位径口胆嚢造影法 2361 例の経験

○新妻 伸二 (県立がんセン
ター新潟病院)

50.8. より 61.12. まで、径口胆嚢造影剤を使用し、右下側臥位、水平 X 線束、セオスニン筋注による胆嚢造影を 2361 例におこなったので、その結果を報告する。

1. 胆嚢収縮により逆流した造影剤で、左右の肝内胆管まで造影されたのが、74.3%。総胆管が造影されたのが 92.2% で、径口法で胆管の診断が可能となった。

2. この体位で大腸などの障害陰影との重なりがなくなった例が 54.5%、立位の時重なりが無い例と合計すると 94.8% が障害陰影がなく診断が容易となった。

3. 肝内胆管、総胆管などが、径口造影剤で造影されたため、総胆管周辺の疾患の診断に有用であった例は 22 件であった。

4. 総胆管のスパズムをみる例があり、生理学的に興味あることであった。

2) 当教室における最近の胆石症

○福田 喜一・伊賀 芳朗
川口 英弘・吉田 奎介 (新潟大学第一外科)
武藤 輝一

過去 36 年間に経験した 1568 例の胆石症症例を集計した。男女比は 1 : 1.29。症例数は増加傾向を示し、各年令別に見ると 60 代、70 代の高年令層の増加が著明であった。結石の種類別にみると、全症例ではコ石 61.1%、ピ石 31.7%、黒色石 6.7%、まれな胆石 0.5% であり、その推移をみると、近年黒色石の増加が著明で 15% を占めるに到った。そこで臨床症状の有無、胆汁中細菌培養陽性率を各結石間で検討した。黒色石は無症状例が 62% と他石 (コ石 27%、ピ石 16%) に比し多く、細菌陽性率は 33% と低率であった (コ石 45%、ピ石 82%)。また黒色石は外観形態が多種であり、赤外線分析にてもその分類が困難な場合がある。成因、病態等不明な点が多い黒色石が近年

著明に増加し、治療上からもその解明が望まれる。

3) 当院における無石胆嚢炎症例の検討

○笹川 哲哉・峯村 正実
渡辺 雅史・堀 聡彦 (立川総合病院内科)
杉田 健一・味方 正俊
渡辺 裕・大貫 啓三

昭和 57 年 1 月から昭和 62 年 7 月までに当院で経験した無石胆嚢炎は 14 例で、男女比は 1 対 1、年齢は 25 才から 86 才、平均 62 才であった。背景因子としては他疾患での手術後、高血圧、肥満、慢性関節リウマチ、狭心症がみられたが 6 例では不明であった。症状は右季肋部痛、発熱が主で肝機能検査上特異な点は認めず、超音波検査では胆嚢腫大、胆嚢壁肥厚、胆嚢内泥状物の存在等を認めた。14 例中緊急手術は 2 例、待期手術 1 例、死亡例 1 例で他の 10 例は保存的治療にて改善をみた。従来から本症は重篤な病態下で発症することが多く、死亡率も高いとされていたが、自験例では背景が不明の軽症例も多くみられ、超音波検査による早期診断と、保存的治療の早期開始が重要と考えられた。

4) 磁器様胆嚢 3 例の検討

○大隅 雅夫・正田 裕一
児島 高寛・宝田 彰
宮田 展宏・細内 康男
佐野 義明・真木 武志 (群馬大学第一外科)
新井 和男・石崎 政利
正田 弘一・竹之下誠一
長町 幸雄

我々は比較的稀とされている磁器様胆嚢の 3 例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。症例は 61 歳、67 歳、74 歳の女性で、それぞれ上腹部痛、集団検診における右上腹部石灰化陰影、食欲不振を主訴に来院し、腹部単純撮影で右上腹部の石灰化陰影を認めた。3 例ともに胆嚢管の閉塞、結石の充満を認めた。切除胆嚢の軟線撮影で筋層に一致した石灰化層が認められた。

我々の検索しえた本邦報告例は 115 例であり、年齢は 22 歳から 82 歳で男女比は 1 : 4.8 であった。胆嚢管閉塞を認める症例 61 例 (52.6%) であり胆嚢結石は 66 例 (55.2%) に認められた。また胆嚢癌の合併は 14 例 12.1% で胆石保有者の約 0.85% に比べて高値であった。

5) 胆嚢腫瘍性病変の 2 例

○朴 鐘干・山本 賢
斉藤 健吉・田代 成元 (田代消化器化病院)

術前検査にて診断が困難であった胆嚢腫瘍性病変を 2 例経験したので報告する。症例 1 は 39 歳の女性、上腹部

不快感が続く為来院、腹部超音波検査にて胆嚢底部に径15mmの腫瘍性病変を認め、手術的入院となった。腹部CT、DIC施行し、腺腫を疑い胆嚢摘出術を行ない病理にてコレステロールポリープであった。症例2は60才の女性、胆嚢炎にて治療を受け軽快後手術勧められ、紹介され入院となった。腹部超音波検査にて胆嚢頸部に腫瘍性病変を認め、腺腫を疑い手術を施行した。手術所見にて病変は胆泥塊であった。近年画像診断の進歩により数多くの胆嚢腫瘍性病変が発見される様になったが、画像診断のみでは診断を得る事が困難な場合もある為、より直接的な診断法の確立が望まれる。

6) 食道静脈瘤破裂で初発した原発性胆汁性肝硬変(PBC)の2例

○小島 亨・高木 均 (前橋赤十字病院 内科)
植原 政弘・中村 保子
片貝 重之
蜂谷 裕・松本 弘 (同 外科)
塩崎 秀郎・餐場 庄一
市川 邦男・竹沢 二郎
長嶺 竹明・山田 昇司 (群馬大学 第一内科)
小林 節雄

症例1は60才の女性。吐血を主訴に来院す。食道内視鏡にてLs, CB, F2~3, RC(+)の静脈瘤を認め、食道離断術時の楔状肝生検でPBCと診断した。抗ミトコンドリア抗体(AMA)は陰性だった。症例2は47才の女性。糖尿病で外来通院中、下血を主訴に入院した。食道内視鏡で、Lm, CB, F2, RC(+)の静脈瘤を認め、食道離断術時の楔状肝生検で肉芽腫を認め、連続切片で、PBCと診断した。AMAは陽性であった。食道静脈瘤破裂で初発するPBCは稀ではなく、かかる例の肝組織を得ることが診断上、特に有用であると思われた。

7) 原発性硬化性胆管炎における糖代謝及び、膵内分泌機能に関する検討

○亀田智恵子・長嶺 竹明
吉浜 豊・小杉 広志 (群馬大学第一内科)
山田 昇司・小林 節雄

〔目的〕原発性硬化性胆管炎(以下PSC)は、原因不明の疾患である。本研究ではPSCの病態解明の一助として糖代謝及び膵内分泌能につき検討した。

〔方法〕PSC5例を対象として75g OGTT, グルカゴン試験を行い、慢性肝疾患、健常対照群と比較検討、又膵ラ氏島抗体(以下ICSA)も測定した。

〔成績〕各群における耐糖能異常の頻度は、CH, LC, PSCの順に高くなり、75g OGTTにおける Δ IRI/

Δ B.S.(30')ではPSCは低値を示し、グルカゴン試験における最大IRI反応(μ g/ml)も低値を示した。PSC1例にICSA陽性例もあった。

〔考案〕PSCでは耐糖能異常や膵B細胞の異常が示唆される事から、ステロイド療法の際には、糖尿病の発症に充分注意を要すると思われた。

8) 肝不全に対する血漿交換、吸着療法の意義

○植原 政弘・高木 均 (前橋赤十字病院 内科)
小島 亨・飯塚春太郎
片貝 重之
高山 尚・斎藤 修一
阿部 毅彦・竹沢 二郎 (群馬大学 第一内科)
長嶺 竹明・山田 昇司
小林 節雄

肝不全に対するPlasma exchange及びDirect-hemoperfusionの意義に関して、施行例12例(劇症肝炎3, 亜急性肝炎2, 肝硬変2, 肝硬変合併肝癌5), 非施行例12例(肝硬変7, 肝硬変合併肝癌5)について検討した。施行例中生存例は3例で、死亡例においてT-Bilが高く、PTが延長している傾向にあり、生存例では治療翌日のPTが50%以上に保たれていた。死亡例ではBUN, Crの上昇をみる例が多くMOFを惹起していた可能性が示唆された。重篤な合併症はみられなかったが輸血後肝炎が2例にみられた。施行例、非施行例の死亡例における生命予後は有意な差を認めず、Cost-benefitは施行例で有意に悪く、今後の治療の適応についてはさらに慎重な検討が必要と思われた。

9) 肝動脈塞栓療法及びSMANCS/Lipiodol動注療法における胆汁酸動態について

○鈴木 正和・畠山 重秋
太田 宏信・川口 秀輝 (新潟大学第三内科)
野本 実・上村 朝輝
市田 文弘
大貫 啓三 (立川総合病院内科)

原発性肝癌に対する、肝動脈塞栓療法(TAE) SMANCS/Lipiodol動注療法(SMANCS)がもたらす胆汁酸動態を中心に検討した。(1)GPT値はTAE群の7例中6例において、TAE施行2日後に最高値となる上昇を示し、またSMANCS群においても同様であったが、TAE群の方が上昇の程度は著明であった。

(2)総胆汁酸値の変化は、TAE及びSMANCS前後で一定の傾向はなかった。(3)CA/CDCAはTAE群、SMANCS群ともに全例で一過性の低下を示したが、